

中村古峡「蕃地から」の方法

——遺品「古峡ノート」と漱石「満韓ところぐ」をめぐって——

佐々木 亜紀子

キーワード：中村古峡・夏目漱石・「蕃地から」

はじめに

「中村古峡資料群と近代の〈異常心理〉に関する総合的研究」の研究¹会で調査された中村古峡のノートから、「蕃地から」²（『中央公論』臨時増刊号、一九一六・七）の素材と考えられる記述が多数見つかった。

この作品は、夏目漱石が古峡宛書簡で「先達て中央公論に出た蕃人の事を書いたものは面白う御座いました」³（一九一六年八月二四日付）と言及したものである。この書簡はかねて漱石に持ち込んでいた二つの小説の不採用通知でもあったことから、一種の慰め、あるいは気遣いという可能性も考えられる。しかし漱石の評価に値するものが皆無とはいえないだろう。

本稿では、「蕃地から」を中心に「哈爾濱（ハルピン）まで」「鷺巒鼻（ガランピイ）まで」といった当時の〈外地〉を素材にした作品を見渡しながら、漱石の「満韓ところぐ」との類似点をさぐり、漱石

が「面白う御座いました」と評価した真意を検討したい。

*論中「蕃地」「蕃人」をはじめ、さまざまな差別用語がありますが、当時の慣用語あるいは引用として使用します。差別を助長する意図はありません。

*遺品撮影及び掲載をご許可いただきました中村古峡記念病院のご厚意にお礼申し上げます。尚、本研究は、JSPS科研費JP19H01234の助成を受けたものです。

一、変態^{メタモルフォーゼ}する人・中村古峡

中村古峡（本名翁^{しげ} 一八八一—一九五二年）は、夏目漱石に師事した小説家であり、精神を病んで入院した中原中也を診察した医師である。曾根博義・森洋介らによる実証的研究⁴を参考に、拙稿「変態^{メタモルフォーゼ}

る人・中村古峽——結節点としての『殻』⁵と重なる点もあるが、古峽の文学に関わることを中心にその生涯を概観しておきたい。

古峽は現在の奈良県生駒市に生まれたが、父が政治活動で家産を失ったため京都に転居した。そこで杉村楚人冠の知遇を得、父亡きあと京都府立医学校を退学したのち楚人冠を頼って上京した。一九〇〇年に第一高等学校に入学し、森田草平らと同級になった。ともに一九〇三年に東京帝国大学文科大学に入学し、ロンドンから帰国した夏目金之助（のちの漱石）の講義を受けた。

大学卒業後、もともと楚人冠を通じて仏教清徒同志会の『新仏教』の編集などに携わっていた古峽は、その楚人冠の紹介で東京朝日新聞社社員となるが、一方で漱石に師事して小説家を目指し、『朝日新聞』に小説や翻訳などを掲載した。長編小説「回想」（一九〇八年）と『殻』（一九一二年）とが『東京朝日新聞』に掲載されたのも漱石の推挙であった。

「回想」はいわゆる「家庭小説」の枠組みでしかなかったが、『殻』は単行本化もされ当時は一定の評価もあった。同じ一九一二年から発表された漱石の『行人』が、主人公一郎という「知識人」の狂気を描いたことに比較すると、『殻』は精神病で亡くなった弟をモデルにしているため、いわば「一般人」の精神病を扱った点が注目される⁶。それに加えて、視点人物である主人公を含めた病者の家族が、翻弄され苦悩し、疲弊してゆく様を中心化されている点が目を惹く。

実際に、古峽はこの弟の病のためもあって、学生時代は経済的に常に厳しい状態であった。漱石はそのころから、金銭的援助を含めた個

人的な関わりをもち、『殻』をはじめとする小説の指導もしていた。だが一九一三年に単行本化された『殻』をめぐることで漱石とは齟齬があり、師弟関係には距離ができたと言われる⁷。とはいうものの、漱石門弟の代表格である森田草平とは晩年まで懇意でもあったうえ、一九一五年には草平らが中心になって出版した『孤蝶馬場勝弥氏立候補後援——現代文集』⁸に、漱石、草平、鈴木三重吉、小宮豊隆、野上白川（豊一郎）、野上彌生子らとともに名を連ねている。そして、のちに詳しく述べるように、漱石に小説を送って新聞掲載の依頼もしている。これらから考えれば、古峽は確かに漱石の「弟子」といえるだろう。

しかしながら、いわゆる（漱石山脈）といわれる漱石の門下生グループのなかに、古峽が入れられることはない。それは古峽の紆余曲折の人生、まさに「変態する人」としての人生にも関わるだろう。曾根が命名した漱石の「異端の弟子」⁹とは、漱石と古峽との関係を的確に表している。

一九一六年一二月漱石没後、古峽は出版人としても活躍しつつ、変態心理研究者として「日本精神医学会」を設立して診療部を設け、『変態心理』を創刊する。そのかたわら、一九二六年、四五歳で東京医学専門学校に編入学し、二年後に医師免許証を取得するなど、正統な医学教育を受けて、現在の中村古峽記念病院の基礎を作った。一九四二年には六一歳にして名古屋帝国大学から医学博士の学位を受けている。

以上のように中村古峽は、ジャーナリスト、小説家、出版人、変態心理研究者、精神科医師、そして病院経営者へと転身を重ねる生涯を送った。彼の個性は、まさにこの転身にあるといえよう。

今回紹介する「古峡ノート5」などは、千葉県の中村古峡記念病院所蔵の遺品である。確認されている古峡の「ノート」は一二冊で、「古峡ノート5 (83178395)」は大正元年一月から大正二年一月までのものとされる(写真1・2)。ほかに曾根がガラスケースに別置した「古峡自筆ノート(S.O.S.C)」がある(写真3)。

二、漱石書簡にみる『殻』以降の小説評

古峡はのちに小説家から転身するのであるが、小説家としての野心を未だ抱いていた時を本稿では扱いたい。

『殻』のあとに続く小説を模索していた古峡が、漱石に『朝日新聞』への自作の掲載依頼をしていたことは、漱石書簡(一九一五年六月四日付け)などから確認できる。

「此次の小説を書きたいといふ御希望の書面拝見しました」と始まるこの書簡は、掲載中の『道草』のあとに自分の小説を掲載してほしいという「希望」に対する返事のように、『朝日新聞』への掲載を諦めるよう諭す口調である。

次に確認できる古峡宛の漱石書簡は、その書簡から一年以上経った一九一六年八月二四日付け書簡である。この書簡では単に依頼を断るのではなく、古峡から預かっていた小説二作を返送している。

感じた通りを申ますと、どうも小説(好い意味でいふのですが)らしい感じが乏しいのです。ことに最初の赤子を殺す気狂の如きは滑稽な感じが起る丈です。(中略)たゞ残酷な人だいふ事を強

中村古峡「蕃地から」の方法 (佐々木亜紀子)

ひつける積ではないでせう。又夫なら芸術品として何の価値もないでせう。もしさういふ意味で書いたのではないとするなら、(中略)ある連続した原因結果を具像的に示し得る真(○は原文に拠る。引用者注)の發揮でなければなりません。(中略)悉く陳腐と平凡を離れた意味で読者の眼を驚ろかし同時に啓発しなければなりません。

このように、第一作目を批判し、二作目については、次のように記す。

僕の考では是とても芸術品になつてゐないと思ひます。(中略)原稿は一先づ御返し致します。

先達て中央公論に出た蕃人の事を書いたものは面白う御座いました。

この書簡にある「蕃人の事を書いたもの」こそが、本稿で取り上げる「蕃地から」のことと考えられる。度重なる『朝日新聞』不掲載の断りの果てに、付記のように書かれたこの一文は、漱石の気遣い程度にも解釈できるだろう。

しかし、これだけ丁寧に「小説らしい感じ」のための方法を指南し、読者への「啓発」の必要性や「芸術品」としての価値を、ことばを尽くして説明した漱石が、お世辞で「蕃地から」にわざわざ言及してほめるとは考えにくい。漱石が「面白」と感ずるような側面を今一度考えてみる必要もあろう。「芸術品」としての価値とまでは評価できな

いとしても、少なくとも〈外地〉への旅がもたらした内容や方法の「面白」さは、「満韓ところ／＼」の漱石ならではの観点があった可能性もある。そこで本論では、〈外地〉に関わる漱石と古峡の作品の検討から、「蕃地から」の方法と位置づけを検討したい。

三、「蕃地から」の概観と先行研究

「蕃地から」は先の漱石書簡の前月、すなわち一九一六年七月『中央公論』の臨時増刊号（のち『変態心理の人々』（大阪屋号書店、一九二六）所収）に発表された。初出の目次には「小説」とある。

初出となった『中央公論』は「中央公論世界大観号創作」と銘打ち、与謝野晶子や小山内薫の七小説と二脚本を掲載している。古峡以外では、有島生馬が「孤鸞鏡中影」で釜山、奉天、天津、北京への旅を描き、虚子の「内地の海辺より」が、「朝鮮」に住む人へ書簡という形式で〈外地〉を描いている。また長田幹彦が「積丹の少女」で積丹を取り上げており、「世界大観」という名のもとに、当時の植民地主義に傾斜していることが、全体的に読み取れる。

「蕃地から」は、旅先から「K君」への書簡という形式で、「僕が此の前台湾の最南端鸞鼻の燈台から君に出した、あの長い手紙はもう見て呉れただらう（一）」と語る。そして「一、蕃地からの第一信」「二、テボ・サドガイと其の口風琴」「三、草埔後（ソウボアウ）の一夜」「四、恐ろしき一時間」「五、頭目の家の宝物」の五節から成り、そのあとに、「東京へ帰つて」とはじまる後日談が置かれている。ここでは、帰国後半年程で、「数蕃社」の「叛逆」を『台湾日日新聞』の報道で知り、同

地で世話になった人々に思いを馳せ、「尊敬すべきわが同胞の運命を思つた」と結ぶ。

ここいう「鸞鼻の燈台から」の「あの長い手紙」とは、「蕃地から」に先立って、一九一三年六月から七月に『朝日新聞』に一六回掲載された「鸞鼻まで」と考えてよいだろう。「蕃地から」は、「鸞鼻まで」から三年以上経っているが、その続編の一面を持つことを示唆している。両作品の材は、のちに詳しく述べるように、古峡が一九一三年に台湾を旅したときのものであることが「古峡ノート5」から裏付けられる。

「鸞鼻まで」については、簡中昊が作中の地名から「旅行行程」を推察しつつ、「この紀行文は猟奇的であり、一般人の目線により近く、「原住民の「改造」する可能性と「残虐の本性」という二つの着目点を作り、原住民に関する新しい思考を展開していった」と述べている。

また河原功は「蕃地から」を「商業ベースの総合雑誌にみる、原住民を本格的に扱った最初の作品となるう」としつつ、「叛逆」についての後日談が、「犠牲となった警察官たちを哀悼することでこの作品を終結させていることから、彼の視点は、あくまでも支配者たる「内地人」の目で、しかも旅行者の目で原住民を見ているだけである」と論じている。だがこの件に関して、河原は「中村古峡ひとりを責めるわけにもいかない。台湾原住民に対する日本人の認識程度はその程度のものであったし、新聞報道も台湾原住民には冷淡なものだった」とも記している。

いずれにしろ、時代の通念から自由ではないことは確かだ。植民地

主義を疑うことのない古峡の政治的立ち位置が露呈しており、〈外地〉への旅の危うさは否定しがたい。このことを確認したうえで、次には、「古峡ノート」を解読しつつ、〈外地〉への旅を取材したほかの作品を検討する。

四、「古峡ノート5」に記された台南旅行と二作品

古峡は一九一三年と一九二〇年に台湾旅行をしている。主たる目的は取材ではなく、二度とも最初の結婚相手である小畑照世に関わっている。一度目の旅行では照世と同地で会っており、同年の四月に入籍している。そして二度目の旅行は照世の父が死去したためであった。

「鶯嚙鼻まで」と「蕃地から」両作のものになったのは、一度目の台湾行であり、古峡の遺品である「古峡ノート5」には、この時の旅程、料金、取材中のメモ及び下書などが多く記されていた。

「古峡ノート5」から見つかった旅行中の行程を記したメモ(8375-8377)からは次のような、足跡が読みとれる。一九二二年二月二十八日から一九一三年一月一日は船中。一日に基隆、五日に台北、八日に台中。九日から一二日まで阿里山、そして二十日まで台中。その後、船で移動したと思われるが、二二日以降は判然としない部分もある。

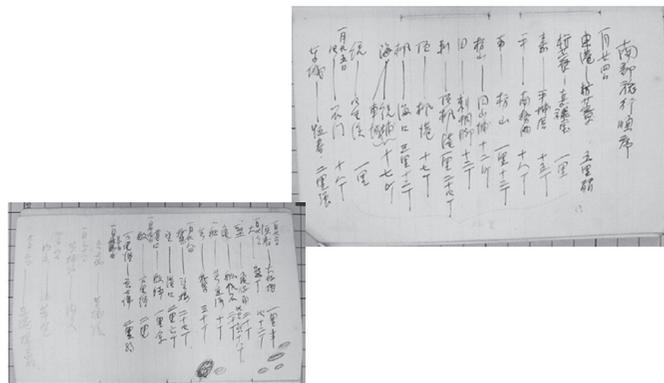


写真 1 : 8376 ・ 8377

そして、「鶯嚙鼻まで」「蕃地から」に関わる旅程(写真1)は、台南に到着した二四日から二月一日である。一月二四日は、東港・枋山・楓港・海口・車城・四重溪。一月二五日は、四重溪・石門・恒春。一月二六日は、恒春・大板轆(タイハンロク)。一月二七日は、大板轆・墾丁・亀仔角(クラアル)・鶯嚙鼻。一月二八日は、鶯嚙鼻・望楼・漢口、そして蚊蟀(マンス)泊。一月二九日は、蚊蟀から高士佛(クス

クス)。一月三〇日は、高士佛から草埔後泊。一月三一日は、草埔後から内文。二月一日は内文・葦芒(スボン)。そして二月二日に東港帰着。作品に言及される地名を照合してみると、「鶯鬚鼻まで」(一九一三・六〇七『朝日新聞』一六回)第一回から第九回にあたる、東港から四重溪は一月二四日。第十回から十一回の石門は、同月二五日。第十二回恒春は同月二六日。そして第十三回から第十六回の大板轆から鶯鬚鼻は同月二七日の見聞である。「鶯鬚鼻まで」の末尾では「長くなるから、一先此処にて筆を擱く」とあって、三年以上のちの「蕃地から」でその続きが描かれた。

即ち、第一節は一月二八日、第二節は同月二九日、第三節は同月三〇日、第四節は同月三一日、第五節は同日から二月一日の見聞と推定される。つまり、「蕃地から」は一つの節がほぼ一日の出来事に対応しており、のち述べるように、「旅行日記」のような側面をもっている。

ただし、書簡形式の小説らしく、「蕃地から」は冒頭で「K君」に向って「僕」が「高士佛蕃社の公学校の一隅(一)」から書いていると設定されており、「僕が其の燈台(鶯鬚鼻燈台を指す…引用者)に別れを告げたのは、昨日の朝の八時であつた(一)」とあるので、一節が一日の出来事ではあっても、二日分をまとめて手紙で書いているという設定になっている。また末尾近くにやはり「K君」に呼びかけて、「獅頭蕃社の方面へ出掛ける積りだ。まだ二三日は蕃地を出ら(れ…引用者)ない(五)」など、事実そのままではないフィクション性もみられる。

だがこの二作品が連続する体験を素材にしているという件に関しては、旅程からも明らかである。更にそれを裏付けるものとして「古峡ノ一

ト5」⁸³⁸⁷(写真2)がある。

ノートには、横書きで、「六時灯台ニ着ク 火ノ着ク所ヲ見ル」「レズ1高サ一間余」「水溜タンク 九個二間四方 深サ九尺 外ニ六個」と右頁にあり、内容は「鶯鬚鼻まで」最終回の内容に一致する。

そして左頁には、やはり横書きで、「ツマ(舌)―生蕃 ツバ(唇)―鹿兒島 ツバ(唾)―内地人」などであり、「蕃地から」冒頭節の「蚊蟀支庁長の舎宅」で「此地方の生蕃の言語や風俗と、内地人特に鹿兒島地方の其等とが非常に類似してゐる点(一)」として話題にした例と一致している。

続けて書いたと推定される左右の頁が、三年の開きがある二つの作品に分けて表現されているのだ。

五、「古峡ノート5」に記された「蕃地から」の素材

「古峡ノート5」には「蕃地から」の素材と推定されるメモや下書などが、⁸³⁸⁷のほかにも多く見られる。先にあげた第一節の素材となつた⁸³⁸⁷以外は、縦書に変わっているが、他の節に関わる頁を以下に紹介したい(写真2)。

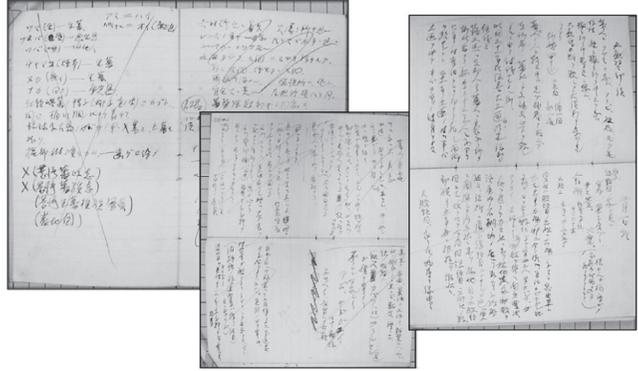


写真 2 : 8387・8384・8380

「二、テボ・サドガイと其の口風琴」^{パザエン}に関するもの。

8386 (下)「日英博 八瑤—四名(男バカリ) クスクス—八(男五女三—子ヒエヒロ日英博)」

8384 (下)「菌黒ク、赤面、鼻低ク」「白ノ胴衣ノ上ニ黒トンビ、獸皮ノ襟ヲキル 銀ノ腕輪ニ、親父カベツ(姓) プラルヤン(名) ガ旗ヲ貰ヒタリ 子ナレド分家シヨリ テボ、サドガイ四十歳位 子四人アリ、長男十六歳」

中村古峽「蕃地から」の方法 (佐々木重紀子)

8384 (上)「蕃人ノ英国記 町モ家モ大、美、立派 水道、田モノナイガミカンモ 薯モアル」^{「女ハ腰ガ細イ 巡査ガ非常ニ大キイ」}

8383 (下)「歌ヲウタフ、寄宿生」「礼ノウタ 其後ハ困ツタ、遅クナルト云フ 何デモ感情其儘ヲ云フ ファザエン」「カベツカル、」

「三、草埔後の一夜」に関するもの。

8382 (下)「非常ナ谷坂、六時前草埔後着、水面上ニ千四百尺 九〇戸 六百人住」

「四、恐ろしき一時間」に関するもの。

8381 (上)「クラユウ 駆狐遊社社長—ガルジグジ(姓) チユヂユイ 明治元年生四十六」

「五、頭目の家の宝物」に関するもの。

8380 (下)「二月一日朝 内文総頭目ノ家ヲ見ル 宝物、粟三房ツ、」
 「萱 大甕」「人頭棚 頭骨五十位 今一ツ六十余 石板石 厚三寸申二尺五寸 内文社ニ股頭目ノ祖先ハ太陽ノ子ナリト其由来ハ太古天ヨリ太陽ノ卵ニ今ノ潮州管内ガビヤガン社ニ落ち、日ヲ経テ孵化シタルハ男女二人男カジツ女マアカイ、夫婦ニナリテ其卵殻ヲ携ヘ南方豊沃ノ地ヲ追ウテカ々社ニ来リ」

8379 (下)「パラリグリグト」ト云フ丸木ノ中ニ空ニ鑿チ円筒形トナシ其上ニ板石ヲ以テ蓋トシタルモノ二個アリ 一ツ高約一尺五寸一ツ高サ約二尺余、其少ナルヲ最モ尊重シ此内、先祖及豚猪鹿蛇等ノ骨ヲ納メアリト 太古外国人(西洋人) 当社ヲ攻ムルヤ敵多クシテ耐ユル能ハズ 將ニ全滅セントスルニ当リ此器ヲ屋外ニ出セシニ中ナル靈魂怒リテ」

8379 (上)「先祖「サラカツ」(ラカツハ蕃語豪傑)ナルモノハ女ナレドモ非凡ノ豪勇ニシテ始メ「チャヂヤカボス」社ヨリ内文社ニ移住ノ際長約七尺巾五尺厚約二寸」

8378 (上)「粟穂三把ヲ翌年粟ノ收穫スル迄屋内ノ柱に吊シオキ翌年収カクスト共二三ヶ採潰シ其実ヲ採リ穂殻ノミ此中ニ納ム」

以上は、ノートの中の一部分であるが、五つの節のなかでは、第三節に関わる記載が少なく、第五節に関する記載が多い。

「二、草埔後の一夜」の内容は、主に腹痛で一夜を明かしたというものである。幾度も戸外で「用を足した」寒さと、茂みから聞こえた物音に、「蕃社」同士の「葛藤」を想起して「心臓が胸の中でそのまゝ、石になつたやうな感じ(三二)」が述べられている。このような聞き書きでない内容には、下書が見当たらない。

反して「五、頭目の家の宝物」に関するメモや下書は最も詳細で分量も多い。文化人類学的、あるいは人種学的視点からの関心といえようか。特に「首棚(五)」を実際に取材し、創始の神話を聞くことは通訳を介していたはずだが、非常に詳細である。聞き書きのメモのあとに、すぐに下書と推定できる記載が続き、ほとんど訂正や書き損じがない。古峽の筆力の確かさと速さが印象的である。

六、「哈爾賓まで」と漱石「滿韓とこころぐ」

中村古峽には「鶯嚙鼻まで」「蕃地から」以外にも、「哈爾賓まで」(『新仏教』一九一〇・二)や「変態心理雑話(台湾の童尻(タンキー))」(『変態心理』一九二五・七)、「変態心理雑話(生蕃のマカワサイ)」(『変態

心理』一九二五・八)「樺太まで」(『変態心理』一九二五・九及び一〇)など(外地)を取材したものがあつた。ここでは、初めての(外地)作品である「哈爾賓まで」をとりあげ、夏目漱石の「滿韓とこころぐ」との関連に注目しつつ「蕃地から」の方法との接点につなげたい。

「中村古峽 年譜」¹⁴の一九〇九年の項には、「五月から六月にかけて「滿韓」旅行、ハルピンまで行く。六月二十九日、帰郷」とある。旅程の詳細は明らかではないが、漱石の「滿韓」旅行が同年の九月二日から一〇月一七日であるから、それよりも四か月先んじた旅行であつた。

しかし、発表は漱石の「滿韓とこころぐ」(『朝日新聞』同年一〇月二二日から二三月三〇日、休載を挟み五一回)には遅れ、「哈爾賓まで」が『新仏教』に掲載されたのは翌年一九一〇年一月であつた。

その冒頭には、「はしがき」として以下のようにある。

大連旅順の見物も一通り済んだ(中略)友人に相談したら(中略)内地から滿洲を見に来た奴は、大抵南滿鉄道を止りにして、土産話も其間に限つて居る故(中略)其より長春以北の事だよ(中略)北滿洲のまだ誰も手の付けない新らしい処で、世間をあつと云はせてやつては。(中略)つい浮々と乗せられて、其いつあ面白い、可し行つて見やう

北滿洲の「誰も手の付けない新らしい処」を描く意欲が、「はしがき」として述べられている。南滿洲鉄道総裁中村是公の「おもてなし」で旅する漱石の「滿韓とこころぐ」を意識した内容のようにも読める。

だが作品は、「一」で大連に着き、「二」で金州駅を過ぎたところで終わっている。末尾には「旅行記の一節」とあるが、少なくとも複数回連載し、タイトル通り哈爾濱までの旅を描いて「世間とあつと云はせてや」る予定だったのだろう。しかしこの続きは少なくとも『新仏教』に掲載されずに終わった。その原因を推察すれば、やはり伊藤博文の暗殺という社会的大事件であろう。

漱石が「満韓ところぐ」を掲載し始めたばかりの一九〇九年一月二五日に伊藤博文が射殺され、漱石すら「満韓」としながら「韓国」のことは書かなかつた／書けなかつた時代に、「其いつ面白い、可し行つて見やう」という気楽な（外地）表象が受け入れられるとは考えにくい。そういった時代の流れが第二回以降の掲載を見送る原因の一つであつたかもしれない。

小森陽一は漱石の「満韓」の旅を追いつつ、「満韓ところぐ」を詳細に論じている。¹⁵ 論考では、漱石が「満韓」と題しながら「韓」を書かなかつた意図などを含めて、「南満鉄道会社」というのはどういう会社なのか」ということを、一つひとつ例をひいて、読者にその内実を伝えていくという小説的な書き方になつた旅行記」と結論づけている。それは「もう大晦日だから一先やめる（五十一）」¹⁶ という末尾のことを、字義通りではなく、韓国に「書き及ばないため」の「漱石の思惑」と解釈する考えでもある。「満韓ところぐ」掲載の傍ら、『満洲日日新聞』に「韓満所感上・下」（同年一月五日・六日）¹⁷ を発表していた漱石ならではの判断だという論には説得力がある。

小森論のとおり、「満韓ところぐ」は通底する意図に支えられ構成

された「小説的な書き方になつた旅行記」として読むことが確かにできる。しかし一方で、この作品は短篇あるいは「小品」として享受された歴史もある。

たとえば、日本文学学院（生田弘治）編『新叙景文範』（新潮社、一九一一年）では、「満韓ところぐ」の第三十八回だけが「暮れて行く野」と題して載せられている。また『金剛草』¹⁸（至誠堂書店、一九一五）では、第十三回を「極楽水の自炊生活」とするなど、十三、十四、二十一、二十五、二十七、三十、三十三、五十の合計八回分が、それぞれ独立した「小品」としてタイトル付きで採録されている。

『金剛草』には漱石自身が「自序」を付け、松本道別からのたつての依頼で出版することになった経緯などを語っている。これを「前身」とした『漱石文芸読本』（新潮社、一九三八）の「解題」では、松岡譲が「原著にない題名は、恐らく原編者（松本…引用者注）の附けられたものと思ふ。中には多少どうかと思ふものがないでもないが、とにかく一応漱石自身の検閲を経たものであらう」と述べている。

つまり「満韓ところぐ」の一部分が、別々のタイトルのもとで一話ごとに完結した「小品」として読まれることを漱石が許可したと推定され、それだけでなく、実際にそのように作品が享受されてきたという歴史があるのだ。小森論の意義は、そのような享受の歴史で見えにくくなつていた作品の一貫性を新しく指摘したことにある。

それは「満韓ところぐ」という作品の方法に関わる。要するに、「満韓ところぐ」とは、ある一貫した意図でまとめられる長篇としての連続性と、一話ごとに完結した「小品」としての独立性とを併せも

つように工夫された作品なのだ。

「満韓ところぐ」の二年余りのち、『彼岸過迄』を発表するにあたって、漱石は「彼岸過迄に就て」（『朝日新聞』一九二二・一・一）で、以下のような予告文を出している。

かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、其の個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだらうかといふ意見を持してゐた。

「満韓ところぐ」の単行本化ということでは、一九一五年の縮刷本以前は、「文鳥」「夢十夜」「永日小品」とともに『四篇』（春陽堂、一九一〇・五）に収められていた。「夢十夜」に顕著なように、これらもやはり、長篇としての連続性と短篇としての独立性を併せもつ方法的に類似した作品群といえよう。加えて一九一五年には、『彼岸過迄』とこれらを合した『彼岸過迄 四篇』が春陽堂から出版されている。

いずれも「個々の短篇が相合して一長篇を構成する」「仕組」で構築された方法的に類似した作品である。もちろん『彼岸過迄』の方法は、「夢十夜」などに比べれば、形式と内容とが分かちがたくより複雑化しているが、これは新聞連載ならではの方法であり、いわゆる「後期三部作」にも共通する構成である。

七、旅を描く方法と幻の『台湾遊記』

漱石の「満韓ところぐ」の連載修了の翌月、「満韓」の旅を先にしていた古峡の「哈爾賓まで」は、たった一度の掲載で終わってしまった。その後発表された〈外地〉を材にした作品が、先述した「鷺鬘鼻まで」である。

「哈爾賓まで」と「鷺鬘鼻まで」の間に、古峡は『殻』を『朝日新聞』に発表し、小説家として一定の評価を得ていた。そして「鷺鬘鼻まで」も漱石の「満韓ところぐ」と同じ『朝日新聞』紙面に²⁰十六回連載された。

この作品は、「鷺鬘鼻まで」という総タイトルのもと、「一、生蕃袋と傘一本」からはじまり、「十六、東洋一の大燈台」まですべての節に各々タイトルがついている。先に確認したように、日程として連続する台南の旅を題材に、移動した場所や体験を小さな話題としてまとめ、まさに鷺鬘鼻燈台まで達している。いわばこの作品も「個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだ」ものといえよう。連載が頓挫した「哈爾賓まで」ではなし得なかつた漱石の「満韓ところぐ」に做った方法が選ばれているのではないか。そしてその方法が「蕃地から」でも踏襲されているのだ。

また「満韓ところぐ」は、単なる〈外地〉の報告には終わらず、再会した旧友との思い出や、旅をする漱石自身の胃痛を含めた身体性に筆を費やしている点が注目される。単なる風物・風景・名所旧跡紹介を脱し、漱石自身の独自の旅の報告という側面が肥大化しているともとれる。

古峡もまた、「鷺鑿鼻まで」では足の痛み、「蕃地から」では腹痛の話題を入れながら、一般化されることのない独自の旅の経験伝えてくる。特に「蕃地から」は、先の旅程で照合したように、一話が一日の出来事となっており、「旅行日記」に近い側面も見られる。このような方法の模索は、「鷺鑿鼻まで」と「蕃地から」の後に出版した『仙南仙北温泉游记』（古峡社、一九一六）にも共通する。

『仙南仙北温泉游记』の「巻頭例言」には、一九一六年七月一六日から八月五日の「三週間の旅行日記」とある。『松島と金華山』（古峡社、一九一七）とともに、「宮城県知事の委嘱」²¹で、宮城県庁の「甚大の好意と便宜」の下に温泉を巡った体験に、二十八もの温泉の「案内記めきたるもの」が挟み込まれ、折込の地図や「温泉入浴者心得」「通俗温泉科学」「我国温泉の歴史」という「三博士の講話」を再録している。宮城県の温泉を巡った体験を「旅行日記」として一つ一つのトピックを重ねながら、「温泉游记」としてまとめ上げられている。

写真 3 : SO-3-1_26

中村古峡「蕃地から」の方法（佐々木亜紀子）

これ以上詳しく検討する紙幅はないが、古峡がこの作品を「旅行日記」としていることに注目したい。曾根が注目した「古峡自筆ノート」（写真3）にもこの語がみられるからである。「旅行日記」の欄には「伊豆めぐり」「房総紀行」などの作品名が並ぶ。写真では明瞭ではないが、実物を点検したところでは、同じ列の八行目からは、「台湾游记」「温泉游记」「松島金華山」と書かれていた。²²

「温泉游记」は「仙南仙北温泉游记」であろうが、一度に書いた様子を考えれば、「台湾游记」とは、「鷺鑿鼻まで」と「蕃地から」を併せたもの、あるいは「蕃地から」の「K君」への書簡小説というフィクション的な設定などを取り外して併せたものである可能性が高い。とすれば、今回紹介した「古峡ノート5」は、幻の「台湾游记」により近いものと言えよう。

共通する「游记」という用語は、『仙南仙北温泉游记』にも「序」を寄せた楚人冠の『大英游记』（一九〇九年・一九一四年版…一九〇八年版は「遊記」）に因むかもしれない。「ノート5」832,833には、「殻」が「朝日新聞」に掲載されていた一九一二年一月四日の日付の（833上段）杉村先生モ酔フ、而シテ大ニ余ノ「殻」ヲ賞ム（下段・欄外）…又曰ク君ノ名声ハ今僕ノ大英遊記ノ時ノ如シト」という記述がある。²³ 幻の「台湾游记」は杉村の出世作にあやかるうとした命名だったとも考えられる。

既に述べたように、一九一六年ごろの古峡は『殻』のあとが続かず、漱石から小説を酷評されていた。いわば小説家としてのスランプにあり、「旅行日記」というジャンルの「游记」で、ともかくも書き続けて

いる状態だった。

しかし、同年末には漱石が没した。古峡は翌年に出版社を興し、日本精神医学会を設立し、『変態心理』を創刊する。人生の転機が始まろうとしていた。

おわりに

「蕃地から」は古峡が小説家から転身する最後に位置する作品である。晩年の漱石に辛うじて評価された最後の小説でもあった。

漱石の「面白う御座いました」という評価の内実は、今となつては類推するしかない。知られざる〈外地〉への取材が、当時としてはごく早い時期であったことを「面白」いとしたのかもしれない。あるいは台湾先住民族の風俗・風習など文化人類学的関心対象となる内容を「面白」いとした可能性もある。しかし本稿では、〈外地〉の旅を描く方法に注目した。

「満韓」の旅の作品化は、伊藤博文射殺事件によって、漱石にも古峡にも困難なこととなった。その後漱石は、小森によれば『門』へと向かった²⁴わけだが、古峡は漱石の「満韓ところ／＼」に類似する方法で、台南を描くことになった。その方法とは、それぞれの節の独立性と一つの作品としての一貫性を併せもつ新聞小説ならではの方法である。漱石はその方法を『彼岸過迄』以降のいわゆる「後期三部作」などで、より一層高度化してゆき、古峡はその方法を「旅行日記」として、過去の作品とともに分類しようとした。

今後は〈外地〉作品に限らず、「旅行日記」にあげられた作品群を当

時の紀行文にも目配りしつつ検討し、漱石のみならず、楚人冠の影響も考えたい。また中村古峡資料群にあるノートも順次活字化する予定である。

1 研究代表者竹内瑞穂・科学研究費研究（基盤B 2019-2021年度）。

2 「蕃地から」の引用は初出（『中央公論』臨時増刊号、一九一六・七）に拠る。旧字は新字に適宜改め、ルビを省略した部分がある。また傍点には特に注がなければ引用者に拠る。「」内は、古峡のテクストを参照した引用者による読み仮名。

3 夏目漱石の書簡及び作品の引用は『漱石全集』（岩波書店、一九九三～一九九九）に拠る。

4 「中村古峡 年譜」（『変態心理』と中村古峡——大正文化への新視角』不二出版、二〇〇一）など。なお、以降も古峡の動向についてはすべてこの年譜に拠る。

5 竹内瑞穂＋「メタモ研究会」編『変態』二十面相——もうひとつの近代日本精神史』第4章（六花出版、二〇一六・九）。

6 竹盛天雄「解説一九一三（大正二）年の文学状況の素描」（『編年体大正文学全集 第二卷大正二年』ゆまに書房、二〇〇〇）参照。

7 曾根博義「異端の弟子——夏目漱石と中村古峡——（下）」（『語文』第百十四輯、日本大学国文学会、二〇〇二、一二）、「異端の弟子——夏目漱石と中村古峡——（補遺）」（『語文』第百十六輯、日本大学国文学会、二〇〇三、六）。

8 馬場勝弥後援会編『孤蝶馬場勝弥氏立候補後援 現代文集』（実業
之世界社、一九一五）には、漱石は「私の個人主義」を、古峡は「夜
の街」（小説）を掲載。

9 曾根博義「異端の弟子―夏目漱石と中村古峡―（上）」（『語文』第
百十三輯、日本大学国文学会、二〇〇二、六）ほか。

10 小田光雄「古本屋散策 6 中村古峡の出版」（『日本古書通信』第八
七八号、二〇〇二・九）

11 簡中昊「近代日本の台湾原住民認識―作家たちが見た「野蛮人」
―」（<https://cini.ac.jp/raid/500001024630>amp: 2021.25 閲覧）。

12 河原功「日本統治期の台湾文学と「内地」の作家たち」（河原功は
か『台湾近現代文学史』研文出版、二〇一四）。

13 河原功『翻弄された台湾文学―検閲と抵抗の系譜』（研文出版、
二〇〇九）。

14 前掲「中村古峡 年譜」。

15 小森陽一「戦争の時代と夏目漱石―明治維新150年に当たって」（か
もがわ出版、二〇一八）。

16 小森論では「二年に亘るのも変だからひとまずやめる事にした」と
あるが、拙稿では注3で示した全集に従う。

17 黒川創「漱石・満洲・安重根―序論に代えて」（『国境（完全版）』
河出書房新社、二〇一三）及び『定本漱石全集 第十六卷』（岩波書店、
二〇一九）参照。

18 松岡譲は『金剛草』を、同年九月に出版された『色鳥』（新潮社）
と「本質的には姉妹集」だと解説している（『漱石文芸読本』（新潮社、

一九三八）「解題」）。

19 松本道別については、小森陽一が『金剛草』自序の「注解」（漱
石全集 第十六卷）岩波書店、一九九五）で「社会運動家」としてい
る。奥村大介「松本道別の人体放射能論―日本における西欧近代科
学受容の一断面」（栗田英彦ほか編『近現代日本の民間精神療法―
オカルト不可視なエネルギーの諸相』国書刊行会、二〇一九）では、大杉栄や
福田英子とも「交流」があり、一九〇五、六年ごろから一九一〇年ま
で「兇徒聚集罪の首謀者として逮捕・投獄され」という経歴をもつ
「霊術家」としている。なおこの件に関しては、一柳廣孝氏（横浜国
立大学）からご教示いただいた。

20 ただし「満韓とくく」第二十四回は「文芸欄」に掲載された。

21 前掲「中村古峡 年譜」。

22 同じく「古峡自筆ノート」（SO31_36）では「台湾日記」という語
もある。これは『日記文自在（作文熟達全書第一編）』（三侠社、一九
一七）の企画メモと考えられる。

23 前掲曾根博義論文（二〇〇二・一二）で、既に詳しく翻刻されてい
る。

24 前掲小森陽一論文（二〇一八）。

追記 長きにわたりご指導くださった

都築久義先生の計報に接し、二人目の父を喪った気持ちです。先生は
明朗で邪気のないお人柄をもって、知の扉を開くようにして惜しみな
く知識と経験をお与えくださいました。先生は常に慈愛に満ちた師で

あり、尊敬すべき研究の導き手でした。長年のご学恩に心より感謝し、御魂の平安をお祈り申し上げます。

有る程の 菊抛げ入れよ 棺の中

(漱石『思ひ出す事など』七の下)